

---

# さんのお！ 短編集

尋乃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

さんのお！ 短編集

### 【Nコード】

N7962U

### 【作者名】

尋乃

### 【あらすじ】

とある県にある、田舎の私立高校のお話。短編集のような。自己満足で書いてます。読み手にやさしくありません。

サブタイトルお借りしました>>

\*\*\*『変わっているお題配布所』

” <http://www.geocities.jp/program> ”

f f i t t i /  
”

\*\*\*7『学園モノ書き(描き)さんに100のお題』

” http://azisairanbu.fc2web.com  
/100gakuen.htm ”

## 入学式

この日、学園に新たな仲間達がやってくる。

彼らにとって、学園で迎える一番初めのイベント。

「マイク、音が小さいかしら。少し上げてもらえますか?」

「会長、もうすぐ時間なんでスタンバイしてくださいね。」

「一年生並び終わったよー。」

「保護者さん入り終わりましたあ。」

「在校生達黙らせて。」

「よし。吹奏に連絡入れてくるよ。」

「……。」

「うわ、来賓のあの人。頭うつす！アレで隠してるつもりかな。」

「指差さないの。ほら、放送席行くわよ。」

「よし。時間だ。始めましょうか。」

吹奏楽の演奏と共に新入生が入場してくる。

心なしか、緊張している様思える。

理事長、生徒代表挨拶。

来賓からの祝辞。

式は二時間程で終わった。

新入生と、来賓席の人達の退出を見届けてると、在校生達が騒ぎ始める。

それを静めて、片付けの指示をだした。



片づけが一段落したところで、先程の新入生達を思いだす。

ふいに笑みがこぼれた。

よつこそ、山王高校へ。

これからの三年間が、君達にとって最高の時間になることを祈っている。

「あ、会長。何処に意識飛ばしてるんですか。早く片付けて教室戻りますよ。」

「……ああ。」

## 出会いとすれ違いの春

「1年A組の小田仁志です。  
皆さんと一緒に良い学園作りに取り組んでいきたいと思っています。」

よろしくお願いします。」

新しい春の初め、少し緊張しながら挨拶をしたのは何日前だっただろう。

「こんにちは。」

「あ、ども。こんにちは。」

生徒会に入って、放課後には生徒会室に来るようになった。

部屋に入ると、副会長の一人、長田さんに挨拶をして与えられたスペースに荷物を置いた。

教室に居るのは、先ほど挨拶を交わした長田さん（二年生だ）、窓際の席でなにやら作業をしている榊原さん（三年の男子）と自分を入れて三人。

三人だけ。

生徒会役員が全員揃ったのは、一番初めの顔合わせの時の一回のみ。

生徒会がこんなので良いのか、と思う。

長田さん曰く、

「割り当てられた仕事は、皆さんこなしていられるから、問題はないんですよ。」  
「だそうだ。」

そんなものなのか。

「それに、1学期ですからね。部活動と掛け持ちされてる方は、いろいろと忙しいんですよ。」

部員の勧誘とか？

まあ、忙しいのなら仕方がないのか。

しかし、11人いる役員の内、いまだに会話をしたことがあるのが三人だけ、

というのはどうなんだろう。(長田と日比野と榊原)

会長の顔もうる覚えだしなー。

見ないと覚えられないよな。など思いながら、本日の仕事(榊原さんの手伝い)に取り掛かった。

## 屋上

「ねね、屋上行ったことある？」

「ううん、無い。てか入れるんだ？」

「ああ。前昼休みに行ったけど、結構賑わってたぞ。」

「へえ。」

「でもあそこ変なんだよね。」

「あー、アレだろ。フェンスの張り紙。」

「そうそうっつ。これでもか、ってほどベタベタと。」

「え、何々？何の張り紙？」

『自殺志願者は遺書を残して逝って下さい。』

「は？」

「じつじつのもあったよ。」

『フェンス越えは危険です。鍵は消火栓の所に在ります。』

『

「何の鍵さ。」

「フェンス開ける鍵。」

「屋上のフェンス高めだからさ、所々にドアがあつて外側に  
行ける様になつてんだよ。」

「そのドアの所に鍵かかつて、張り紙があるわけ。」

「消火栓のトコにあるって？」

「そう。でね、調べてみたら、あるのよこれが。」

「オレも見た見た。マジで在るからな。しかも開いたし。」

「ええっ、マジで？つか良いのか学校!？」

「だよな。ガツコが生徒の自殺支援してどーすんだっての。」

「だよなー。」

「でもここ数年自殺者出てないんだってさ。」

「えー、張り紙効果？」

「誰が考えたんだろうな。」



胃薬（前書き）

1年A組 小田仁志

## 胃薬

「どうしたんですか。」

「気分でも悪い？」

俯いたまま胃をさすっていたら、長田と日比野に声をかけられた。

「いや、ちょっと……。」

胃が痛い、とは言えず言葉を濁しているよ、

「もしかして、胃ですか？」

簡単に言い当てられた。

「ええ、ちよっと…」

胃の辺りに手をおいたまま、つい先程まで騒いでいた人物を遠目でみる。

その小田の様子に、長田は合点がいったようにうなづいた。

「胃薬、あるよ。」

「え？」

長田は給仕用の棚から小瓶を出すと、とん。と小田の前に置いた。

お湯を注がれた湯飲みも手渡される。

「はい。お湯で飲むと早く効きますよ。一回四錠ですからね。」

「あ、ありがとうございます…。」

なぜ生徒会室に胃薬が置いてあるのか疑問に思ったが、考えるのは後にした。

蓋を開けて小さな錠剤を四錠、手に取る。

「本当、小田君が生徒会に入ってきてくれて助かりました。」

胃薬を飲み込んだところで、見守っていた長田が言った。

日比野もうなづく。

「ホントだよね。あの二人を止めてくれるの、小田だけだもんね。」

あなた達が止めにはいらなだけでしょっ…。

思っが言葉にはできない。

の。  
「前は、卒業した先輩の役だったんだよ。あの二人を止める

卒業しちゃてどうなるかと思ってたけど。」

「ええ、小田君が入ってくれて、良かったですね。」

ふふふ、はははは、と幻聴が聞こえる気がする。

小田は小さな薬ビンを静かに握り締めた。

至極平和な春の午後（前書き）

1年A組 小田仁志

## 至極平和な春の午後

私立山王高校生徒会室。

六時間目は自習。

何となく気が向いたので来てみると、

同じく自習なのが、長田さんと日比野さん、榊原さんがいた。

「ぶじぞ。」

「あ、ありがとうございます。」

「……………」

「あれ、いつものじゃないね。」

「ええ。昨日、春日さんにいただいたんです。」

「カスガ？」

「1年B組の学級委員長さんですよ。」

「ああ、メガネの。」

「ええ。とても可愛い方なんですよ。」

長田さんと日比野さんの会話をBGMに、自分は窓の外を眺めていた。

手には紅茶の入ったカップ。

何の紅茶かはわからないが、香りが良い。(味は、どう良いのかわからない)

ふと、周りに目をやる。

ニコニコ。笑顔で紅茶の入ったカップに口をつける長田さん。

微笑を浮かべてカップを持つ日比野さん。

黙々と、付け合いのクッキーを頬張る榊原さん。



この生徒会室で、静かな時間を送ることができるとは。

あの人たちが居ないと、こんなにも平和なのか…。

某副会長と役員、その他騒がしいメンバーを思だし、また窓の外へ目をやった。

その先の景色ではなくさらに遠くを見る。

生徒会に入り、初めて過ごすであろう静かなひと時に、

ああ、平和っていいな。

などと、心から思った春の日の午後だった。

本日の授業終了まで、あと20分弱。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7962u/>

---

さんのお！ 短編集

2011年10月9日11時29分発行